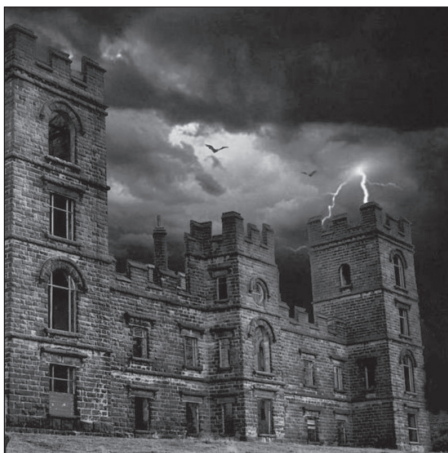


クライトン館の謎

メアリ・ブラッドン



私の子供時代と青春時代を過ごした地方には、クライトンという非常に名の通った一族が住んでいました。大地主のクライトンについて語ることは、遠く離れたイングランド西部地方の、この権力者について語ることに他なりません。そして、クライトン館はステイーン王⁽¹⁾の時代からずっと、この一族によって所有されてきました。もともとは大きな修道院の一部だったのですが、当時の珍しい翼棟と中庭を囲む回廊つきの建物群が、今なお素晴らしい保存状態で残っています。この屋敷のほずれにある部屋は、確かにどれも天井が低く、少し薄暗く、陰気な感じでした。しかし、めったに使われていないわりに住まいとしては申し分なかったので、お屋敷が招待客でいっぱいになる祝祭の時などは、いつも役に立っていたものです。

お屋敷の中心部分はエリザベス女王⁽²⁾の時代に再建され、今では宮殿のように豪壮な建物になっていました。南側の翼棟と（縦に細長い八枚の窓が付け足された）屋根の高い音楽室は、アン女王⁽³⁾の時代に新築されたものです。要するに、お屋敷は実に壮麗な大邸宅で、私たちが住んでいる州では、お国自慢の一つになっていたのです。そして、土地という土地はすべて、クライトン教区の中だけでなく、その境界をはるかに越えた所まで、大地主であるクライトン様の所有になっています。それから、教区教会は屋敷を囲む大庭園の柵内にあり、その聖職禄を授ける権限はクライトン様にありました。それは大した価値もない寺禄ですが、跡継ぎでない息子の長男以外の者に授けるのに重宝なもので、実際に

授けられることがしばしばあったのです。あるいは時たまでしたが、裕福なクライトン家の家庭教師や従者に与えられることもありました。

私もこのクライトン一族と血がつながっています。現在の旦那様の遠い親類にあたる私の父は、クライトンで教区牧師を務めておりました。その父の死によって、私は生計の道を完全に断たれてしまったので、荒涼とした未知の世界に乗り出し、従属的な地位で生活費を稼がざるを得なくなりました。こんなことをクライトンの人間がしなくてはならないとは恐ろしいことです。

伝統と偏見に支配された我が一族に対する敬意から、私は彼らから遠く離れた外国で仕事を探さねばならないと思いました。外国であれば、クライトンの人間が一人ぐらい地位を下げたからといって、自分が属している由緒ある家の面目をつぶすようなことはないでしょう。幸いなことに、私はしっかりとした教育を受けていましたし、静かな片田舎の牧師館で勉強に精を出していたので、ありふれた現代的な教養を身につけることができました。それで私は利運を得て、ウィーンで上流階級のドイツ人の屋敷に勤め口を見つけたのです。そして、ここに七年間ほど留まり、気前よく支払っていたお給金を毎年かなり貯えておりました。生徒たちが大人になると、優しい奥様はサンクトペテルブルグ⁽⁴⁾のもっと有利な勤め口を見つけてくださいました。そこでさらに五年ほど過ごすことになったわけですが、その終わり頃には私の心の中で長年ついていた願望——もう一度あの懐

かしい我が田舎の屋敷を見てみたいという多年の願望——に屈してしまいました。

イングランドにはあまり近い親類はおりません。母は父の数年前に亡くなっていましたし、たった一人の兄は遠く離れたインドで公務に就いていました。姉妹はおりません。とはいえ、私はクライトン一族に連なる人間でしたし、出身地の故郷を愛していました。おまけに、私の父母に愛情と敬意を示してくれた友人たちが、私を心から歓迎してくださることは分かっております。しかし、私が故郷で今度の休暇を楽しもうという気になったのは、時おり旦那様の奥様からいただいていた、真心のこもった手紙によるところが大だったのです。奥様は心の優しい、気高い女性でしたので、私が自活の道を選んだことに十分な理解を示され、いつも私の友だちであることを態度で示してくださっていました。ここ最近のクライトン夫人からの手紙の中で、いつも言われていたのは、そろそろ里帰りしたいなと思った時は、どうか自分の屋敷に長期滞在してくださいということでした。

これから私がみなさんに話をする事件のあった年の秋も、奥様は「今度のクリスマスにいらっしやればよろしいのに」と手紙で書いてくれました。「それはもうにぎやかになることでしようし、私は館でいろんな楽しい人たちにお会いできるのを楽しみにしています。エドワードが来春早々に結婚するので、主人はとても満足していますのよ。だって、これは申し分のない、ぴったりの縁組なのですから。婚約者もお客様としていらっしやる予定です。それはもう美しいお嬢様で、おそらく美しいというよりは、り、り、い、と言った方

がよろしいでしょうね。ジュリア・トレメインとおっしゃるのよ。ヘイズウェルに近いオールド・コートのトレメイン一族の方で、あなたも覚えていらつしやると思うけど、とても由緒ある家です。兄弟姉妹が何人かいらつしやるので、お父様からの遺産はほとんど、いやまったく期待できないでしょうが、かなりの財産を伯母様から残していただくということで、こちらの田舎では相当な遺産相続人だと思われています。だからと言って、こんな事実のエドワードが影響を受けたわけじゃありませんよ、もちろん。あの子はいつものように衝動的に巡回裁判⁽⁵⁾の舞踏会で恋に落ち、一週間もしないうちにプロポーズしてしまったのです。これはどこから見ても完全な恋愛結婚ですわね、ほんとに」

これに続いて心のこもった招待の手紙が来ました。イングラランドに着いたら、そのまま館に直行し、好きなかだけ長く滞在してもらって構いませんのよ、という内容でした。この手紙で私の心は決まりました。幸せだった子供時代のなつかしい光景を再び見てみたいという願いは、ほとんど居ても立ってもいられないほど強くなっていました。私は将来の見込みを損なうことなく、自由に休暇を取ることができました。それで十二月の初旬、寒々とした陰鬱な天候にもかかわらず、母国に向かって出発したのでした。まずはサンクトペテルブルグからロンドンまでの長旅。これは外交特使のマンソン少佐が親切にも私に付き添ってくださいました。私の当時の雇い主であったフルイドルフ男爵が、お友達であった少佐のそうした御好意を私のために取り付けてくださったのです。

私の年齢は三十三歳。青春はとうに過ぎ去ってしまい、美貌などは最初から持ち合わせていません。オールドミスを押し通す女として、つまり人生の大舞台で主役を演じたいという願望などで心を乱されたりしない、そんな静かな観客として自分のことを考えることに甘んじておりました。私のような気質の人間にとつては、こうした受動的な生活の方が気楽でした。身を焼きつくような、情熱的な血は流れていなかっただけです。私の全人生はごく普通の務めや、数少ない素朴な楽しみで満たされておりました。私の生活に特別な魅力と明るい光を与えてくれた人たちは、すでに亡くなっています。彼らを生き返らせることなどできるはずもないし、彼らのいない真の幸せなどあり得ないと思っております。あらゆるものが落ち着いた中間色を帯びていたのです。私の場合、人生最良の時も波風が立たず、これといった特色もありませんでした。それは平穏ながらも物さびしい初秋の、太陽が見えない、どんよりした日のように思えました。

私が到着したのは晴れて星が見える夜の九時ごろで、古い館は盛観を極めていました。お屋敷の前にある長い石畳のテラスから、半円状に植えてある立派な古いカシの木やブナの木まで、大きく広がっている芝生は霜が少し降りて白くなっていました。また、南の翼棟のほずれにある音楽室から、重々しい枠つきのゴシック調の窓がはめ込まれた北の翼棟の古い部屋まで、まばゆい光の帯が延びていました。その景色を見て私が思い出したのはドイツの伝説^⑥に出てくるような、この世のものとは思えない宮殿です。私は、光がすべ

て一瞬のうちに消え、長い石畳のテラスが突然の暗闇に包まれてしまうのではないか、そんな気がしました。

館の下僕が玄関の広間の扉を開いてくれると、まさしく私の幼児時代とともに記憶に残っていた老執事が、異郷で生活を始めた十二年前から一日たりとも年を取っていないような姿で食堂から出てきて、心のこもった歓迎をしてくれました。それどころか、自分自身の手で、旅行用鞆かばんの搬入を手伝うと言ってききませんでした。私に対して必要以上にへりくだって鞆を一緒に運んでくれたのですが、その行為の力強さは従者たちが身をもって感じるほどでした。

「ミス・サラ、あなた様の優しい顔をまた見られるなんて、ほんとに嬉しゅうございます」この館の忠臣はそう言いながら、私が旅行用の外套を脱ぐのに手を貸し、私の手から化粧鞆を受け取りました。「牧師館に住んでおられた十二年前に比べますと、少し老けられたようですが、それでもすこぶる元気な御様子で何よりです。ほんとにまあ、あなた様を御覧になれば、さぞかし皆さん喜ばれることでしょう！ 私はあなた様がいらっしゃることを奥様自身の口から聞かされたのでございますよ。客間の方へ行かれる前に、その婦人帽をお脱ぎになりたいでしょうね。さあどうぞ。お屋敷は招待客でいっぱいですよ。おい、ジェイムズ。マジヨラム夫人を呼んできてくれないか？」

声をかけられた下僕は裏の方へ姿を消し、まもなくマジヨラム夫人と一緒に戻って来ま

した。この恰幅かつぶくのよい年配の女性は、執事頭のトゥルフオールドと同じように、今の旦那様の父上の時代から館に長く仕えておりました。私は彼女からも同様に心のこもった挨拶を受けました。それから彼女に案内されて、一体どこへ連れて行かれるのだろうかと思っただけ、幾つもの階段や廊下を通り抜けて行きました。

しかしながら、最後に私たちはとても快適な部屋に着きました。それは壁にタペストリーが飾られた四角い部屋で、低い天井は大きなカシ材の梁はりで支えられていました。部屋の様子はそれはもう陽気で明るく、大きな暖炉では赤々と燃える火がゴーゴーと音を立てていました。とはいえ、いくらか古めかしい感じもしましたので、迷信深い人たちであれば、幽霊が出そうだと思っただけかもしれません。

私は幸いにも現実主義的な性格で、幽霊のようなものに対しては完全に懐疑的な人間でしたので、この部屋の古めかしい雰囲気がとても気に入りました。

「マジヨラム夫人、私たちはステイヴン王時代の翼棟にいるのですね？」と私は尋ねました。「この部屋は私自身まったくの初体験で、一度も入ったことがないような気がします」

「おそろくそうでしょうね。この翼棟が古いのは確かですわ。あなたの部屋の窓は古い厩舎の中庭に面していて、そこには旦那様のお爺様の時代に犬舎がありました。その頃は館も今よりずっと素晴らしかったという噂を聞いたことがありますよ。今年の冬は、お客

様がたくさんいらっしやっていますんで、こちらの部屋もすべて使わなくてはならないんです。ですから、さびしいなんて思われる必要はありませんわ。この部屋の隣にはクラニック大尉御夫妻がいらっしやっていますし、反対側の青い部屋にはニューポート家の二人のお嬢様がお泊まりです」

「ねえ、マジヨラム夫人、私は自分の部屋がとても気に入りましたよ。ステイヴン王の時代にすでに存在していた部屋で寝るなんて、考えただけでも楽しくなりますわ。なにしろ館がほんとに修道院だった時代ですから。敬虔けいけんな老いた修道僧が、まじめに膝をついて祈り、この床の板をすり減らしたことでしょね、おそらく」

マジヨラム夫人は半信半疑の目でじっと見ていましたが、それはあまり修道僧の時代なんかに共感を覚えたりしない人のような視線でした。それで、彼女は今ちようど手のかかることをたくさん抱えていますからと言って、その場を立ち去ろうとしました。まだコーヒーさえ出されていなかったのです、自分がそばにいて万事うまく行くように注意してやらないと、食料貯蔵室の女中は物事をちゃんと処理できないと、マジヨラム夫人は思っていましたよ。

「お部屋の呼び鈴を鳴らされるだけで結構ですよ。そうすればスーザンが面倒をみてくれますから。スーザンは昔よく、ここのお嬢様たちの世話を手伝ってくれましたんで、ほんとに役立つと思いますわ。あなたがいつでも自由にスーザンを使えるように、奥様は特

別に命令を出されたんですよ」

「クライトンの奥様には心から感謝しております。ですが、マジヨラム夫人、女中の手助けが必要になることなんて、私には一ヶ月に一回もありませんわ、絶対にね。何でも自分ひとりですること慣れていきますから。ほらほら、マジヨラム夫人、お急ぎになって。コーヒーの方に気を配ってくださいな。私の方は十分もすれば客間の方に降りて行きますから。ところで、たくさんお集まりですの、その部屋には？」

「それはもう大勢ですわ。ミス・トレメイン、それからお母様と妹様もいらっしやっております。むろん、御結婚については全部お聞きおよびでしょうね。きりつとした目鼻立ちのお嬢様で——どちらかと言えば、お高くとまっぺいらして、私は好きになれませんけど。代々、トレメイン家はプライドの高い一族で、ミス・トレメインは大いなる遺産を相続されることになっていんです。エドワード様はそれも彼女のことが大好きで——普通の地面なんか歩かせられないと思っておいでですよ、きつと。でも、なぜかは分かりませんが、別の女性をお選びになればよかったですのにと、私は思わずにおれませんの。若旦那様をもっと大切にしてください、あんな風に相手の心づかいを冷たく無雑作にあしらったりされない方であれば、よかったですかね。でも、こんなことを言う権利は、もちろん私にはありません。ミス・サラ、あなたが相手でなければ、あえて申し上げるようなことはいたしませんわ」

彼女が、居間に行けば食事の準備ができていますよと言つて、そそくさと出て行つたので、あとに残つた私は身支度に取りかかりました。できるだけ急いで着替えをしている時に私が感心したのは、自分にあてがわれた部屋の申し分ない快適さでした。はるか昔の黒っぽい重厚な家具には、ありとあらゆる現代的な道具が備えられていて、その新旧の調和によつて実に心地よい趣が漂つていました。カシ材の大きな化粧台も、ルビー色のボヘミア・ガラス⁽⁷⁾でできた香水入れ、陶器製の筆箱、指輪立てなどが置いてあつて、とても明るく見えました。暖炉の前には、ぜいたくなチンツ⁽⁸⁾が張られたヴィクトリア朝様式⁽⁹⁾の低い安楽椅子があり、その近くには便利なように置かれた、光沢のあるカエデ材の高価そうな小さい書き物机がありました。そして、その後ろにはタペストリーをかけた壁が薄暗い中でぼんやりと見えました。数百年前もその時と同じような感じだったことでしょう。

しかし、昔のことについて夢想にふける暇はありませんでした——そうした夢想を引き起こしやすい雰囲気の一部ではありませんが。いつものように髪を簡単に結つて、きれいな黒のレース（男爵夫人からいただいたもの）で縁を少し飾つた濃灰色の絹のドレスを着ました——どんな場合にも通用する慎み深い略式礼装です。装飾品としては、大切な母の形見である大きな金の十字架を、深紅のリボンで結んで首にかけました。これで私の身なりは完璧です。姿見をちらつと見て、だらしなく見える所がないことを確認してから、私は急いで廊下を通つて階段を降りて、玄関の広間に行きました。そこでは老執事のトゥル

フォールドが私を出迎えてくれ、素晴らしい御馳走が待つ居間へと案内してくれました。

朝から何も食べていなかったものの、この御馳走にはあまり時間をかけませんでした。というのは、早く客間の方に行きたかったからです。しかし、ちょうど食事を終えようとした時に扉が開き、針編みレースの縁飾りがふんだんに施された濃緑色のビロードのドレスを目もあやに着て、クライトン夫人が颯爽と入って来られました。若い頃は美人でしたが、奥様となられた今も、人の目を引く美しさを保っておられました。とりわけ表情が魅力的で、私にとっては美しい顔立ちや顔色よりも素晴らしい、ほればれとするもの思えました。

奥様は私を両腕で抱き、愛情をこめてキスしてくださいました。

「あなたの到着を知らされたのは、ついさっきでしたのよ、ミス・サラ」と奥様はおっしゃいました。「屋敷に到着されて三十分はたったでしょうに。私のこと、ひどい女だと思われたでしょうね！」

「親切この上ない方ですわ。ファニー、それ以外にどう思えるとおっしゃるのですか？ お客様を放って置いて、私を出迎えてくださるなんて、思ってもみませんでした。ほんとに申し訳ありません。あなたが親切なことは熟知しているのですから、こんなに仰々しくしていただく必要はありませんのに」

「まあ、あなた、これは仰々しいとかの問題ではありません。ああいった人たちがいる

前で、あなたと最初にお会いするのは、できれば避けたかったのです。あなたがいらっしやることを、それはもう心から楽しみにしておりましたのよ。さあ、もう一度キスをしてくださいな、お願いですから。ようこそ、クライトンへ。いいですか、サラ、あなたが必要な時はいつも、この屋敷を自分のおうちと思ってくださいね」

「優しいお従姉さま！ 生計のために働くようなことをしましたのに、私のことを恥ずかしいとは、お思いにならないのですね？」

「恥ずかしいですって！ とんでもありません。あなたの勤勉さと精神力には感心しておりますのよ。さあ、客間にいらしてください。あなたに会ったら、さぞかし娘たちも喜ぶことでしょう」

「私も嬉しくてたまりません。この地を離れた時は、まだ二人ともいたいけ盛りで、短い白の子供服を着て、干し草畑でふざけまわっておられました。もう今ではきれいな淑女におなりでしょうね」

「なかなかの美人ですが、兄ほどは端正な顔立ちじゃありませんよ。エドワードはほんとに素晴らしい青年です。母親特有の自慢げな、ひどい誇張に聞こえますが、そう言っても別に気がとがめることがないほどです」

「それで、ミス・トレメインはどちらに？ 彼女にお会いしたのですが……」

彼女の名前を口にしたとき、私はかすかな暗い影が従姉の顔をよぎったような気がしま

した。

「ミス・トレメインには——ええ——確かにほればれとすることでしょうね」と言つて、従姉は少し考え込んでしまいました。

それから彼女は私の手を自分の腕に通して、客間へと案内してくれました。それは大きな部屋で、両端にはそれぞれ暖炉があり、その晩は赤々とした光を放っていました。二十人ほどがあちこちで小さな群れをなし、みんな楽しげに談笑しているように見えました。クライトン夫人は、二人の娘が腰かけている低いソファアに近い暖炉の方へ、私をまっすぐ連れて行つてくれましたが、二人のそばには背丈が六フィートちよつとある若者が、柵の幅広い大理石板に腕をのせて立っていました。この黒い眼の、細かく縮れてウエーブしている茶髪の青年を一目見て、私はエドワード・クライトンだと思いました。母親似であることだけで誰であるか分かつたのです。とはいへ、この屋敷の跡継ぎである彼が、イトン校⁽¹⁰⁾の最下級生だった頃に、たびたび私の方を見上げてくれた元氣な顔とばつちりした眼だけは、はつきりと覚えておりました。

私が主として注意を引かれたのは、エドワード・クライトンの一番近くに座っていた淑女でした。この女性こそミス・トレメインに違いないと思つたからです。背が高く、きやしゃで、頭と首の姿勢は堂々たるものでした。私は彼女を最初にちらりと見たとき、その堂々とした態度に何よりも心を打たれました。なるほど端正な顔立ちで、その点について

は否定できません。必ず彼女にほればれとするはずだという従姉の言葉は本当でした。しかし、まばゆいほど美しい、完璧な目鼻立ちの顔、人目を引く鷺鼻、文字どおりプライドが外に現われたような薄い上唇、ぱっちりした冷たい青い眼、墨で引いた眉毛、そして光冠のような淡い金髪は、私の心を引きつけるどころか、その正反対でした。ミス・トレメインは万人をほればれさせずにおかない——その点は疑いのないことですが、どうして男性がこのような女性と恋に落ちうるのか、私には理解できませんでした。

彼女は白いモスリン⁽¹¹⁾の服を着ていました。装飾品は最高級のダイヤモンドでできた口ケットだけで、それを白くて長い首に幅広のリボンで着けていました。とても量が多く見える彼女の髪は、重量感のある小冠のように編み上げられていましたが、それは小さな頭の上に鎮座すると、荘厳な王冠のように誇らしげに見えました。

この若い淑女にクライトン夫人は私を紹介してくださいました。

「あなたに紹介したい従妹がもう一人いらっしやるのよ、ジュリア」奥様はほほえんでおられました。「ミス・サラ・クライントンで、サンクトペテルブルグから到着されたばかりです」

「サンクトペテルブルグですって？　すごい旅でしたね、それは！　はじめまして、ミス・クライトン。そんな遠方からいらっしやるなんて、ほんとに勇敢な方ですこと。一人旅でしたの？」

「いいえ、ロンドンまでは旅の道連れがございました。とても親切な方です。お屋敷までは一人でしたが……」

ミス・トレメインは幾分うつつとらしいような態度で握手をしてくれましたが、その冷たそうな青い眼で物めずらしそうに私の全身を上げしげと見ていました。私のことを要約し言うならば、「哀れな親類で、さえないおばさん」だったでしょうか——そうした非難するような表情が、彼女の顔に読み取れるように思えました。

ところで、その時は彼女のことを考える時間がありませんでした。エドワード・クライトンが横から急に私の両手をつかんで、愛情をこめて心からの歓迎してくれたので、私は思わず涙が「心の底から目に込み上げて」⁽¹²⁾ しまったからです。

青いクレープ生地⁽¹³⁾の服を着た、かわいらしい二人のお嬢さんが、部屋の別々の方角から走ってきて、「サラ叔母さま」と叫びながら、私に嬉しそうにキスをしてくれました。私は小さな群れをなす三人のクライトン兄妹に取り囲まれ、みんなが子供で私も若かった頃のありふれた娯楽について、様々な質問——これは覚えてますか？ あれは忘れたでしょうね？ 干し草畑での戦争ごっこは？ 牧師館の果樹園での慈善学校⁽¹⁴⁾の茶会は？ ホーズリー・クームでのピクニックは？ チョーウエル共有地での植物採集や昆虫採集の遠足は？——とかいった質問を矢継ぎ早に受けるはめになりました。この質問攻めの間、私たちを眺めていたミス・トレメインの表情には軽蔑が浮かんでいて、どうやらそれを隠した

い様子でもなさそうでした。

「クライトンさん、そんな純朴なアルカディア⁽¹⁵⁾の世界を、あなたが受け入れるなんて思つてもみませんでしたわ」と、彼女がとうとう口を切りました。「どうぞどうぞ、思い出話に花を咲かせてくださいませ。そんな少年少女の体験談は実に興味深いものがありますから」

「こんなことに関心がおありだとは思いませんでしたよ、ジュリア」恋人にとってはかなり手厳しいと思える口調でエドワードが答えました。「つまらない田舎の娯楽なんて軽蔑しておられますよね。ところで、あなたには子供だった時代があるのでしょいか？ 幼い頃に蝶々を追いかけたことなんてないでしょうね」

ともかく、彼女の口出しによつて、私たちの昔話は終わりとなりました。エドワードはいらついてしまい、少年時代の楽しい思い出も、彼女の冷笑的な顔を前にして、すべて消えてしまったようでした。しかし、ジュリア・トレメインと並んでソファーに腰かけていた（ピンク色のドレスを着た）若い女性が席を離れたので、そのあとにエドワードはさつと座つて、その日の夕方はずつと婚約者のために尽くしていました。私は彼女に話しかけている彼の表情ゆたかな明るい顔を時々ちらつと見ましたが、あれほど彼にふさわしくない女性もいないのに、彼女に一体どんな魅力を感じていたのでしょうか。

北の翼棟にある自分の部屋に戻つたのは真夜中で、その時は心のこもつた歓迎を受けた

ことで幸せいっぱいでした。翌朝は早く起き——そうするのが昔からの習慣であったのですが——部屋の窓をおおっていたダマスク織り⁽¹⁶⁾のカーテンを開け、何気なく下の景色を見てみました。

私に見えたのは広々とした厩舎の中庭で、そこは扉の閉ざされた馬屋や猟犬小屋に取り囲まれていました。それらは灰色の岩でできた屋根の低い大きな建物群で、あちこちにツタがはびこっていて、その苔むした古めかしい外観が、この世のものとは思えない興趣を添えているように私には見えました。ここに並んでいる馬屋は長いこと使われていなかったに違いありません。お屋敷のもう一方のはずれ、つまり音楽室の裏手にあつて、館の裏の景色の中で一大特徴となつている立派な赤レンガの建物群が、現在使用中の唯一の厩舎だつたからです。

現在の旦那様の祖父が猟犬をたくさん飼つておられたことは何度も聞いていましたが、その祖父の死後すぐに犬たちは売られてしまつたそうです。それ以後、私の従兄である現在のクライトン氏は、先祖の例にならつて猟犬を飼つてはどうかと一度ならず言われたようです。というのは、このあたりはキツネ狩りにもつて、こいの地域だつたにもかかわらず、お屋敷の周囲二十マイルには、今では猟犬が一匹もいなかったのですから。

しかし、ジョージ・クライトン——お屋敷の現在の当主——は狩猟をする方ではありません。実は、この娯楽を密かに恐れておいででした。なぜかという、狩猟場で折あしく

命を落とした一族の子孫が、一人や二人ではなかったからです。この一族は、その富と繁栄にもかかわらず、まったく幸せだったというわけではありません。莫大な世襲財産が御長男にちゃんと相続されたことは滅多になかったからです。あれやこれやの不慮の死——ほとんどの場合は壮絶な死——が跡継ぎの家督相続を妨げたのです。従姉のフアニーはお屋敷にまつわる過去の悲運について考えるとき、溺愛する一人息子のことで不吉な予感に悩まされることなどないのかしらと、私はいつも思ったものでした。

クライトン館には幽霊が——大きな古い屋敷に堂々とした威厳を完璧に備えさせるのに絶対必要な霊界からの訪問者が——いたのでしょうか？ 確かに、この大邸宅の敷地内でまれに見た者がいるという影のような存在については、私もそれとなく耳にしたことが何度かあります。しかし、それがどんな形をしているのか、突き止めることはできませんでした。

私が質問した人たちは、そんなものは見たことがないと、即答しました。もつとも、耳を傾ける価値もない、馬鹿げた伝説のような昔話であれば、聞いたことがあるということでしたが。一度、この問題を私が従兄のジョージに話したとき、そんなくだらない話は聞きたくないから、口が裂けても二度と触れないでくれと言われ、怒られてしまいました。

さて、十二月はお祭り気分のうち過ぎて行きました。お屋敷は本当に愉快な方たちであふれ、みんな心の底から楽しみ、短い冬の日々をにぎやかに送っていました。かつて慣

れ親しんだ英国の田舎の豪壮な屋敷での生活は、私に絶え間ない喜びを与えてくれ、自分は親類に囲まれているのだと思うと、とても嬉しくなりました。

従姉の子であるエドワードにはたびたび会っていました。どうやら彼はミス・トレメイ
ンに、自分に好かれるためにはミス・サラに対して無愛想にしているはだめだ、というこ
とを分からせようとしているようでした。確かに、彼女はいくらか骨を折って私に愛想よ
くしてくれましたが、あのプライドの高い、見下したような、冷静沈着な態度をめったな
ことでは隠したりしませんでした。にもかかわらず、自分の恋人に対しては満足を与えた
いように見えました。

二人の婚約期間は穏やかな冬アルキユオーン前後(17)の時みたいだったわけではありません。いさか
が絶えない二人でしたが、その詳細についてエドワードの妹たち（ソフィーとアグネス）
と私は面白おかしく話したものです。それはプライドが高い者同士による支配権争奪戦で
したが、エドワードのプライドの方には気品がありました。彼は、卑劣なことは何でも蔑さげす
むような気高いプライド、寛大な性質の人間にそぐわないこともないようなプライドの持
ち主だったのです。この青年は私にとって賞賛の的だったので、母親のほめ言葉をいくら
聞かされても、うんざりすることはありませんでした。従姉のファニーもこの点に気づい
ていたようで、私が実の妹であるかのように、よく打ち明け話をしてくれたものです。

「ジュリア・トレメインのこと、もっと好きになれればいいのですが、実際はそれほど

でもないことに、あなたは気がついておられるでしょうね、たぶん」ある日、奥様は私にそう言われました。「でも、息子が結婚することについては、それはもう嬉しいのですよ。これまで主人の一族は幸せではありませんでしたからね、サラ。ここ何世代もの間、跡継ぎたちが慎重さを欠いて不幸な目にあつたのです。エドワードが子供のとき、私は将来どんなことが起こるかしらと考えながら、よく何時間もつらい思いをしたものです。今もそうですが、これまであの子が期待どおりに育つたことには、神様に感謝しております。あの子の行動については、今まで不安を覚えたことなど一時もないからです。ですが、あの子の今回の結婚については、やっぱり喜ばずにおれません。だって、早死にしたクライトンの跡継ぎはみんな、結婚することなく死んでしまったのですからね。ジョージ二世⁽¹⁸⁾の御代にはヒュー・クライトンが決闘で、その三十年後にはジョンが狩獵場で背骨を折って、それからテオドルはイートン校の学友の銃が暴発して、ジャスパーは四十年前に地中海でヨットが沈没して、みんな死んでしまったのです。こんなふうに列挙しただけで恐怖を覚えますよね、サラ。とにかく、あの子が結婚してくれば、それだけ安全になるような気がします。そうすれば、我が一族の跡継ぎの多くに降りかかった呪いから、逃れることができるように思えますからね。あの子も妻帯者になれば、それが自分の命を大切にしなければならぬ大きな理由となるはずですよ」

私もクライトン夫人と同じ意見でしたが、エドワードが冷酷な美人のジュリアではなく

て、別の女性を選んでくれていたらと、思わずにいられませんでした。あんな方が相手では、彼の将来の生活も不幸なものになるような気がしました。

やがてクリスマスの日となりました——本物の古き英国のクリスマスです。外では冷たい霜と雪、暖かい家の中では飲めや歌えの大騒ぎ、昼間は庭園の大きな池でのスケート遊びや氷の張りつめた街道でのそり遊び、夜は内輪の演劇やジェスチャー・ゲームや素人コンサートがありました。私はミス・トレメインを見て驚きました。こうした夕べの娯楽に積極的に参加しようとしななのです。年配の人たちの間に座って見物する方が好きみたいで、私たちのいろんな態度をとっていたのです。静かに座って、みめ麗しくしていることが、自分の使命だと思っているようでした。みんなの注意を引きたい気持ちなど少しも念頭がないみたいで、その強烈なプライドに虚栄心が入り込む余地はありませんでした。ですが、彼女にそうする気があったならば、音楽の面で人の注意を引くことはできたはずで、なぜなら、クライトン夫人の居間にエドワードと二人の妹さんと私しかいないとき、彼女の歌やピアノの演奏を聞く機会がありました。彼女はお客様のの中では歌も演奏も抜きんでていたからです。

朝と昼、妹さんたちと私は教区の貧しい人たちの家を次から次へと、クライトン夫人からの贈り物を満載したポニーの馬車でまわりながら、何日も楽しく過ごしました。公共機

関による毛布や石炭の配給がなかったので、たくさん生活必需品がそつと優しく支給されたのです。この三ヶ月というもの、アグネスとソフィーは疲れ知らずのお手伝いさん（牧師の娘）と一人か二人の若い淑女の助けを借りて、小作農たちの子供のために暖かい遊び着や重宝な肌着をせっせと作っていました。それで、クリスマス朝には教区の子供たちが、ひとそろいの新しい服で着飾った姿を見ることができました。クライトン夫人は、どの家で何が最も必要とされているかについて正確に把握するという、それはもう立派な才能をお持ちでした。私たちはポニーに引かせた馬車に様々な品物を山のように積んで運んだのですが、お屋敷の気前のよい女主人によって、しっかりと手書きされた書体で、全部の包みに宛名が書かれていました。

こうした私たちの遠征時にはエドワードが馬車を運転することもありましたが、その際に私はクライトン教区の貧者たちの間で彼が抜群の人気を博していることを知りました。彼がとても陽気に楽しく話しかけるので、そんな態度を見て彼らもすぐに気を楽にすることができたのです。エドワードは彼らの名前や間柄、何が不足しているかや何の病気にかかっているかなど、決して忘れてりませんでした。男たちが一番好きな銘柄のタバコを一箱ちゃんど外套のポケットに準備していましたし、いつも冗談を飛ばしていました。それは特に機知に富んだ冗談でなかったかもしれないかもしれませんが、彼らが心の底から笑う声が天井の低い、小さな部屋に響き渡っていたものです。

しかしながら、このような楽しい務めの分担をミス・トレメインは冷たく断つたのでした。

「私は人としての道にはずれていると、今ここで正直に告白した方がよいでしょう。彼らとは気が合いませんし、彼らの方もまたそのはずです。波長が合うということがないのだと思います。それから、むさ苦しい部屋も我慢できません。ああいった風通しの悪い家の臭いを少しでもかぐと、私は熱が出てしまいます。それにまた、彼らを訪問して何の役に立つというのですか？ ただ彼らを偽善者にする誘い水となるだけです。彼らが受け取っても正当かつ当然なものを——毛布、石炭、食料雑貨、お金、ワインなどを——一枚の紙にリストアップし、誰か信頼できる召使いを通して受け取らせた方が、絶対によいですよ。そうすれば、あちらもへいこらする必要がないし、こちらでも我慢する必要がないわけですから」

「でもね、ジュリア、そういったことは我慢の問題じゃないって人たちがいるんだよ」と、エドワードは怒りで顔を紅潮させながら言い返しました。「施しをする喜びにあやかりたい人たちが——悩みやつれた貧しい者の顔が突然の喜びでぱっと明るくなるのを見た人たちが——この小作農たちと地主の間には友好的な絆が、つまり彼らの農家とお屋敷の間には一致する点があるのだと思わせたい人たちが——いるんですよ。例えば、ぼくの母がそうです。こうした務めを君はとていやなことだと思っただけ、母にとつては

無上の喜びなんだ。君が館の女主人となつたあと、変化が生じないといひんだけど」

「まだそうなつていないのですから、その地位に私がふさわしくないとお考えならば、決心を変える時間は十分にありましてよ。お母様のようになりますと、偽つてまで言うつもりはありません。持つてもいけない女の美德については、持っているふり、なんかしない方がよろしいでしょうから」

それ以来ほとんど毎日、エドワードは私たちのポニーの馬車を自分が運転すると言つてきかなかつたので、あとに残されたミス・トレメインは自分で楽しみを見つけねばならなくなりました。結局、この会話が二人の仲たがいの発端となり、それは以前に何度かあつた言い争いにも増して深刻なものになりました。

ミス・トレメインはそり遊びもスケートもビリヤードも好きではありませんでした。最近よく世間で見られるようになったふしだらな傾向が彼女にはなく、午前中はいつも客間にある特定の張出し窓の所に座り、妹のローラに付き添つてもらつて、ベルリン羊毛⁽¹⁹⁾とビーズ玉で簾^{すだれ}の刺繡^{しゅう}をしていました。ローラは姉にとつて奴隷のような存在で、頭の方は独自の意見など望むべくもない、非常に生彩を欠いた感じで、顔の方は姉を青白くして模写した感じでした。

お屋敷に招待された客がもっと少なければ、エドワード・クライトンと彼の婚約者の不和は間違ひなく知れ渡つたことでしょうが、実際には自分の楽しみに余念のない人たちが

館にあふれていましたので、気がついた方はおられなかつたはずですよ。みんなが集まつた時はいつも、この従姉の子はミス・トレメインに心を配っているように——少なくとも表面上は献身的であるように見せていました。実情を知っていたのは私と二人の妹さんだけです。

ですから、この若い淑女が慈悲深い気持ちをすべて拒絶したあと、ある朝、脇の方へ私を手招きし、二十枚の金貨——ソヴリン金貨⁽²⁰⁾——が入つた小さな財布を私の手にそつと渡された時は、本当にびっくりしました。

「今日、これを小作人たちに配つていただければ、非常にありがたいのですが、ミス・クライトン。もちろん私だつて彼らに何かをあげたいと思つています。私がいやなのは彼らと話をする煩わし^{わずら}さだけなのです。あなたは施し物の分配係として適任ですわ。私のつまらない頼み事は、どうか誰にもおつしやらないでくださいね」

「もちろんエンドワードには話してよいですよね」私がそう言つたのは、彼の婚約者が見かけほど無情な人でないことを知つてもらいたかつたからです。

「彼だけはやめてください」彼女は真剣な声で答えました。「その点で私たちの考えが違ふのは御存じのほうですよ。お金を施すのは彼の気に入られたいからだと思われてしまいました。お願いですから、一言もおつしやらないで、ミス・クライトン」私は言われるとおりにしました。この上なく注意して判断力を働かせ、黙つてソヴリン金貨を配つたのです。

このようにクリスマスは過ぎ去って行きました。それは大切な祝祭日の翌日——館の家族や招待客にはとても静かな日——のことでした。同時に、それは召使いたちにとつては——夕方に年一回の舞踏会が——身分の低い小作人たちをすべて招待する舞踏会が催される、そういった盛大な祝祭日⁽²¹⁾でした。しかし、霜が急に解けてしまい、まったくの雨降り日——私のように気分が天気の影響を受けやすい人間にとつては憂鬱な日——となりました。館に到着して以来、初めて私は意気消沈してしまいました。

私と同じように天気の影響を受けた人は他にいないようでした。年配の御婦人たちは客間にある暖炉の一つを半円状に囲むように座り、陽気な娘さんや威勢のよい青年たちは群れをなして、もう一つの暖炉の前でにぎやかに談笑していました。ビリヤードの部屋からは、ボールが頻繁にぶつかる音や伝令兵^{ステントール}⁽²²⁾の大声のように響き渡る、そうした楽しい笑い声が聞こえてきました。私はカーテンで半分ほど隠れた奥行きのある窓の所に座って、小説を——毎月のように町から送られてくる箱にたくさん入った本の一つを——読んでいました。⁽²³⁾

屋内の光景が明るく陽気であるのに対し、屋外の眺めは憂鬱そのものでした。雪に包まれた樹木からなる美しい森、雪で白くなった谷間や波打つ土手は消えてしまい、水につかって薄暗く陰気な草地やその背景にある葉の落ちた物さびしい木立に、陰気な雨がしとしと降っていました。その鈴の陽気な音が大気に活気を添えることもなく、すべてが静寂と

陰鬱に支配されていました。

エドワード・クライトンはビリヤードをすることもなく、不機嫌で落ち着きのない様子で、客間の両端を行ったり来たりしていました。

「ありがたい、とうとう霜が解けたぞ！」彼は私が座っていた窓の前で立ち止まり、そう叫びました。

すぐ近くに私がいることに少しも気づかず、彼は独りごとを言っていたのでした。その時の彼の顔つきは明るくなる見込みがなさそうでしたが、私は思い切って話しかけてみました。

「こんな天気の方が霜と雪よりも好きだなんて、悪趣味ですわね！ 昨日の庭園はうつとりするような美しさ——本当に妖精の国のような景色——でしたのに、今日の庭園ときたら——」

「そうですね、もちろん、美的な観点から言えば、雪の方がよかったですよ。今日は何かがめいるような、大きい沼地みたいに見えますからね。ですが、ぼくは狩猟のことを考えているんです。いまましい霜のせいで楽しみが一日だめになりましたが、これでやっと穏やかな天気にはばらくは恵まれそうです」

「でも、エドワード、狩猟はなさらないのでしょうか？」

「いいえ、優しい叔母さま、そんなおびえた表情を穏やかな顔に浮かべたって、ぼくは

絶対にやりませよ」

「このあたりに獵犬はいないと思つておりましたけど」

「今もいやしませんよ。でも、お国のどこにも負けない立派な獵犬が——ダルバラ犬が——
実はいるんです。二十五マイルほど離れた所にね」

「では、一日の遠出のために二十五マイルも行くのですか？」

「こうした気晴らしのためなら、四十マイルだつて、五十マイルだつて、百マイルだつて行きますよ。でも、今回行くのはたった一日の気晴らしのためなんかじゃありません。サー・フランシス・ウィチャリーの屋敷まで行きます——三日か四日ほど——フランク・ウィチャリー君とぼくとは、クライストチャーチ校⁽²⁴⁾で無二の親友だったんです。今日の到着予定だったんですが、こんな雨の日に丘陵地を越えて行きたくはありませんからね。でも、たとえ天蓋の水門が開いて土砂降りになろうと、明日は必ず行きますよ」

「強情な青年ですこと！」と私は叫んで言いました。「ですが、こんなふう放つておかれたら」私は声を低くして尋ねました。「ミス・トレメインはどう思われるでしょうか？」

「ミス・トレメインには好きに言わせておきますよ。ぼくたちはキツネ狩りで有名な中部地方⁽²⁵⁾の中心にいて、大空には獵犬の吠える声が響き渡っています。彼女はそうしようと思えば、ぼくに狩獵の楽しみを忘れさせることだつてできたんですからね」

「あつ、だんだん分かつてきましたわ。その狩獵の約束は前からの約束じゃなかったの

ですね」

「ええ、実は数日前から、ここに居るのが退屈になり始めたんです。で、二日か三日ほどウィチャリーで厄介になるぞって、フランクに手紙を書きました。とても心のこもった返事をもらったんで、今週末まで厄介になることにしたってわけです」

「来週の舞踏会のこと、忘れていないでしょうね？」

「ええ、そんなことをしたら、母を怒らせることになりますし、招待客を侮辱することになりますからね。何が起ころうと、来週はここにいますよ」

「何が起ころうとですって！ そんなことを軽々しく口にするなんて。この言葉を記憶することになる苦々しい時が、やがてやって来ることになったのでした。」

「そもそも行ったりなんかすれば、お母様を怒らせることになりますよ。お父様と同じように、キツネ狩りをどんなに恐れておられるか、御存じですよね」

「父の反応は実に田舎の紳士らしからぬものです。父は書斎から出ると虫の居所が悪くなる、そうした根っからの本の虫なんです。ええ、両親ともキツネ狩りを観念的に嫌っていることは認めます。ですが、二人ともぼくの乗馬がどんなに素晴らしいか、ぼくを負かすにはウィチャリーなんかでは見られない、もっと広い土地が必要だってことも知っているはず。神経質になる必要はありませんよ、親愛なるサラ、両親には少しも不安の種は与えやしませんから」

「御自分の馬を連れて行くのでしようね？」

「言うまでもないことです。自分の馬を持っている人が別の人の馬に乗りたくないなんて思うもんですか。ペパーボックスとドルイド⁽²⁶⁾を連れて行きますよ」

「ペパーボックスは変わった気質だって、妹さんたちから聞きましたけど」

「妹たちは馬を大きくなった羊ちゃんぐらいにしか思っていないんです。馬も女も素晴らしい奴はすべて、そうした多少の欠点が、つまり気質の荒い所がありますよ。例えば、ミス・トレメインがそうじゃないですか」

「私はミス・トレメインの味方ですよ。この仲たがいの問題で悪いのはあなたの方です、エドワード」

「そうですね？ まあ、どちらが悪かろうと、あの美しいジュリアが優しい顔をして親切な言葉をかけてくるまで、ぼくたちが前みたいになることは絶対にありませんよ」

「キツネ狩りの遠出から戻ってくる時は、もつと穏やかな気持ちになったださいね」と、私は返答しました。「つまり、どうしても行くというのであれば。でも、気が変わってくださればよいのですけど」

「そんな心変わりほとんど不可能ですよ、サラ。ぼくは運命の女神のように決意が固いんですから」

彼はぶらぶらと立ち去りながら、何か陽気な狩猟の歌を口ずさんでいました。その日の

午後になって、私とクライトン夫人が二人だけになると、このウィチャリー訪問の計画について、奥様は次のように話しかけてこられました。

「どうやらエドワードの決心は固いみたいですね」奥様の口調は残念そうでした。「主人も私も家庭内で横暴な行為のように見えることは努めて避けてきました。私たちの大切な息子はとてもよい子ですので、その楽しみを邪魔するのは非常につらいことなのです。主人が危険の多い狩猟場を病的なほど恐れていることは御存じですわよね。これまでは、ああ、ありがたい！ かすり傷一つせずに済みました。でも、一週間に四日もレスターシア州⁽²⁷⁾へキツネ狩りに行った時は、ほんとに、あなた、私は何時間もつらい思いをしましたのよ」

「彼は乗馬がうまいと聞きましたけど」

「とつてもね。この近隣の狩猟家たちの間ではもっぱらの噂です。おそらく、あの子はこの当主になれば、猟犬を何匹も飼いはじめ、曾祖父メレディス・クライトンのなつかしい時代をよみがえらせることでしょう」

「その当時は、私が今いる部屋の窓の下に見える厩舎の中庭で、猟犬がたくさん飼われていたのでしょうかね、ファニー？」

「ええ」と、クライトン夫人が心配そうに答えられたとき、彼女の顔が急に曇ったので、私は驚きました。

その日の午後は、いつもより早く二階の部屋に戻ったので、七時の晚餐のために着替えをするまで、たつぷり一時間ほど暇ができました。この暇な時間を使って私は手紙を書くつもりでした。しかし、部屋に着くと気だるい感じがしたので、机に向かう代わりに暖炉の前にある低い安楽椅子に腰かけ、いつの間にか夢想に陥ってしまいました。

どのくらいの間そこに座っていたのかは分かりません。半分は物思いに沈み、半分は居眠りをしていた——とぎれとぎれの考え事と夢の世界のおぼろげな光景とが混在していた——ちょうどそのとき、私は聞き慣れない音にはっとして目を覚ましました。

それは獵犬係の角笛の音——何度か吹かれた角笛の低い悲しげな音——かつて私が耳にした中で一番この世のものと思えない、遠くから聞こえるような、不思議な音でした。私は『魔弾の射手』⁽²⁸⁾の音楽を思い出しました。ウェーバーが作曲した中で最も気味の悪い一節といえども、そのとき私の耳に何度か届いた単調な音ほど、不気味ではありません。

私は立ちつくしたまま、その恐ろしい調べに耳を傾けていました。周囲はずで薄暗く、部屋は陰になり、暖炉の火はほとんど消えかけていました。聞き耳を立てていると突然、光がぱつと目の前の壁を照らし出しました。例の音と同じように、その光もこの世のものとは思えない——天地のどちらからも射しているようにには見えない、そうした光でした。

私は窓の方へ走りしました。というのは、この恐ろしい光は窓を通って反対側の壁を照らしたからです。厩舎の中庭の大きな門は開け放たれ、鞭むちを持った獵犬係に従う犬の群れに

続いて、深紅のジャケットを着た男たちが、馬にまたがって入ってきました。この光景はすべて、冬の沈む夕陽と男たちの一人が持っていた手提げランプの不気味な閃光とよつて、かすかに見ることができたものでした。タペストリーで飾った壁を照らしたのは、この手提げランプの光だったのです。私には、馬屋の扉が次々と開けられ、紳士たちと馬丁たちが馬から降り、獵犬たちが小屋へ追い込まれ、助手たちが右往左往し、例の手提げランプの奇妙な青白い光が、次第につのる暗闇のあちらこちらで明滅しているのが見えました。しかし、馬の蹄の音や人間の声は全然——獵犬がかん高く吠える声や鳴き声は、まったく聞こえませんでした。あのかすかに聞こえた角笛の音が遠方へ消えてしまつてからというものの、恐ろしい静寂が破られることは一度もなかったのです。

私は窓辺にひっそりと立つて、下の中庭で男たちと動物たちの群れが、音も立てずに散つて行くのを眺めていました。その消え方には超自然的なところは少しもありませんでした。その姿形が虚空の中に消えたり、溶けたりしたわけではなかったからです。私には、一頭ずつ馬がそれぞれの小屋へ導かれ、赤ジャケットの男たちが順番に門からぶらぶら出て行き、馬丁たちの何人かはある方向へ、また何人かは別の方向へ散つて行くのが見えました。物音がしない点を除いて、その光景には何ら不自然なところがなく、この屋敷に来たのが初めてであつたならば、私はその時に見た人影が現実のもので——馬屋もすべて使用中だと思つたかもしれませぬ。

しかしながら、私は知っていたのです——この厩舎の中庭とそれを囲む建物群が半世紀以上も使われていなかったことを。一時間前の予告もなく、とうの昔にさびれてしまった中庭が人でいっぱいになるなんて——空っぽの小屋が犬馬でふさがれるなんて、私には信じられないことでした。

どこか近隣の狩猟グループが、容赦ない雨から逃れるため、ここに喜んで避難してきたのでしょうか？ そんなことはあり得ないと思いましたが。私は幽霊のようなものは何も信じない人間で——幻を見ているのだと思うくらいなら、それ以外のどんな可能性だって、そちらを信じた方がましだと思っう人間です。しかし、あの静けさ、あの角笛の恐ろしい音——あの手提げランプの奇妙な、この世のものとは思えない閃光ときたら！ 私は迷信深い人間ではなかったのですが、額に冷や汗をかき、手足がふるふる震えてしまいました。

数分の間、私は彫像のように窓際に立って、誰もいない中庭をぼんやりと見つめておりました。それから急にびくつきとして、召使い部屋に通じている裏の階段から下へそっと走って行きました。この謎をなんとかして解こうと思ったのです。マジヨラム夫人の部屋への道は昔の経験から知っていたので、この女中頭に私が見たことの意味を尋ねようと思って、そちらに歩みを向けました。私の胸中に深く秘められた確信は、クライトン館の秘密を知っている人に相談するまで、あの光景については一族の者に話さない方がよからうということでした。

台所と召使いたちの食堂の前を通ると、楽しそうな笑い声が聞こえました。従僕や女中はみんな、今晚の饗宴のために自分たちの部屋を飾り付けるといふ楽しい仕事に精を出していました。開いた扉の前を通った時には、ヒイラギや月桂樹の葉、はたまたツタやモミの葉で作った花綱に最後の仕上げをしているのが見えました。また両方の部屋とも豪華なティーのために食卓の準備をしているのが見えました。女中頭の部屋は、長い廊下のはずれの引っ込んだ隅にある素敵な古い部屋——壁板が黒ずんだカシ材の部屋——で、私が子供の頃には砂糖漬けやその他の菓子類が無尽蔵に詰まった宝庫だと思っていた、そういつた大きな戸棚がいっぱいありました。それは陽の当たらない古い部屋で、そこにある大きな旧式暖炉は、夏は炉端に置いた大きな花瓶にバラとラヴェンダーが生けてあって涼しそうな感じ、冬は朝から晩まで丸太がパチパチと燃えていて暖かそうな感じがしました。

私が扉をそっと開けて中に入ると、灰色の波紋のある絹の正装用ガウンをまとい、まるでバラ園のように見える帽子をかぶったマジヨラム夫人は、赤々と燃える暖炉のそばに置いた背もたれの高い安楽椅子でうとうとしていました。私が近づくと彼女は眼を開け、最初はしばらく戸惑ったような顔で、私をじっと見つめていました。

「まあ、あなたでしたか、ミス・サラ？」と彼女は叫びました。「この暖炉の光を受けても、幽霊のような青白い顔に見えますわよ！ ちょっとローソクに火をつけさせてくださいな。それから炭酸アンモニア⁽²⁹⁾を少し持つてきて差し上げますわ。さあ、私の安楽椅子

に座ってくださいませ。まあ、ほんとに全身ぶるぶる震えておいでですよ！」

彼女は抵抗されないうちに私を座らせ、テーブルの上に用意してあった二本のローソクに火をつけました。その間、私は何か話そうとしましたが、唇が乾いていて最初のうちは声を出す力がなくなったようでした。

「気付け薬なんか気にしないでください、マジヨラム夫人」私はなんとか声を出しました。「病気じゃないのですから。びっくりした、ただそれだけのことです。ここに来ましたのは、私をおびやかしたものが何かを説明してもらおうと思ったからです」

「それはどんなものですか、ミス・サラ？」

「このことはあなたも聞いたことがあるはずですよ、確かに。今しがた、角笛が聞こえませんでしたか？　獵犬係の角笛です」

「角笛ですって！　まあ滅相ありません、ミス・サラ。どうしてまたそんな妄想を頭に浮かべられたんでしょうか？」

マジヨラム夫人の赤らんだ頬ほほが突如として青ざめ、その時までには私とほとんど同じ青白さになっていたのが見て取れました。

「妄想なんかじゃありませんよ。確かに音が聞こえ、人々の姿が見えたのです。今しがた狩獵グループが北の中庭に避難してきたのですよ。犬と馬、紳士と召使いのグループでした」

「どんな感じでしたでしょうか、ミス・サラ？」この女中頭は奇妙な声で尋ねました。

「うまく口では言えません。私に分かったのは、みんな赤いジャケットを着ていたということです。それ以上のことはほとんど分かりません。いいえ、手提げランプの光で、確かに紳士の一人はちらりと見えましたわ。白い髪と髭ひげの、背が高い、猫背の方でした。襟えりの非常に高い、ウエストも高いジャケット——百年ものの古いジャケットをまとうていることには、気づきましたけど」

「大旦那様ですわ！」マジヨラム夫人が声をひそめて囁ささやきました。それから私の方を向くと、断固とした態度ながら、努めて明るい口調で言いました。「夢を見ていらつしゃつたんですよ、ミス・サラ。それだけのことです。暖炉の前の椅子で居眠りをし、夢を御覧になられたんですわ、きつと」

「いいえ、マジヨラム、夢なんかじゃなかったわ。角笛で目がさめて窓辺に立つと、猟犬と男たちがやって来るのが見えたのですから」

「御存じですか、ミス・サラ？ この五十年間、北の中庭の門は錠が下ろされ、かんぬきまで差されていたことを。お屋敷の中を通らない限り、そこへは誰も入って行けないんですよ」

「今晚は、よその人たちに雨宿りをさせるために、門が開けられていたのかもしれないわんわん」

「門を開ける唯一の鍵は、その戸棚にかかっているんですから、あり得ませんよ」と、女中頭は部屋の片隅を指さしながら答えました。

「でも、いいこと、マジヨラム、その人たちは確かに中庭にやって来て、今まさに彼らの馬と犬たちがその小屋に入っているのよ。クライトン氏か、従姉のファニーか、エドワードの所へ行って、すべて問いただしてみろわ。あなたが真実を話してくれないのだから」

ある狙いがあつて私はそう言ったのですが、それが効を奏しました。マジヨラム夫人が私の手首をつかんで真剣になつたからです。

「だめです、ミス・サラ、そんなことをなさつては。後生ですから、やめてくださいませ。奥様や旦那様には一言も漏らしてはいけません」

「どうしてなの？」

「あなたが御覧になつたのは、ミス・サラ、この屋敷にいつも不幸と悲しみをもたらすものだからです。死者たちを御覧になつたんですよ、あなたは」

「どういう意味ですか？」私はふと恐怖に襲われ、あえぐように尋ねました。

「おそろく、この館で時々あるものが見られるという噂は、お聞きおよびのことでしょうね——ありがたいことに、長い年月をおいて時々なんです。というのは、そのあと必ず災難が起こっているからです」

「聞くのは聞きましたが」と、私はあわてて答えました。「この場所に取り憑いているのが何であるのか、誰に尋ねても教えてくれないのです」

「そうですとも、ミス・サラ。知っている者は誰も口を割りません。でも、あなたは今晚すべてを見てしまわれたんです。これ以上あなたに隠しておいても仕方ありませんわね。あなたが御覧になったのは大旦那様のメレディス・クライトン氏で、御長男は狩猟場で落馬して亡くなったんです。十二月のある夜のことでした。大旦那様と他のキツネ狩りの一行が無事に館へ戻られてから一時間後に、御長男の亡骸なきがらが家に運ばれて来ました。大旦那様は狩猟場で御長男の姿が見えないのに気がつかれたんですが、そのことは何とも思われなかったようです。御長男はかわいそうに背骨が折れ、溝の中に倒れているところを労働者に発見されました。そのそばには馬が杭くにつながれていたそうです。その日からというもの、大旦那様は一度も顔をお上げにならず、馬に乗って獵犬を追いかけること二度となさいませんでした。キツネ狩りの熱烈な愛好者でいらしたのに。犬と馬はすべて売却され、その日から北の中庭はがらんとなくなってしまつたんです。」「

「こうしたことを最後に見てから、どのくらいの時がたつのですか?」

「もう随分になりますわ、ミス・サラ。こんなことが最後に起こったとき、私はまだすんなりした少女でしたから。それは冬のこと——まさに今晚——メレディス様の御長男が亡くなられた夜のことでした。ちょうど今と同じように、お屋敷は招待客であふれており

ました。あのとき、あなたの部屋に寝ておられたのは、オックスフォードの血気さかんな若い紳士でした。彼もまた例のキツネ狩りの一行が中庭にやって来るのを見たんです。当然ながら彼は窓を大きく開いて、できるだけ大きな声で一行に「出たぞー」⁽³⁰⁾と叫びました。彼は前の日に到着したばかりで、この界限かいわいのことは何も御存じなかったんで、皆さんはどこでキツネ狩りをなさるんでしょうかとか、明日は館の獵犬と一緒にひとつ走りさせてもらいましょとかとか、晚餐の時に言われたんです。それは今の旦那様のお父上の時代です。テーブルの上座におられた奥様は、この話を耳にすると、すぐ顔面蒼白になられました。かわいそうに、それだけの理由がおありになつたんですね。旦那様は卒中の発作に襲われ、その後は口もきけず、誰の顔も分からなくなつてしまわれ、その週が終わらないうちに亡くなつてしまわれました」

「恐ろしい偶然の一致ですが、単なる偶然の一致かもしれないですね」

「他にも聞いた噂がいくつかあるんですよ、ミス・サラ——人をだましたりしない人たちの話です——結局、すべて同じでした。旦那様と獵犬たちの亡霊は、この屋敷にとつては死の警告なんです」

「そんなことは信じられません」と私は叫びました。「信じるなんて不可能です。このことについてエドワード氏は何か御存じでしょうか？」

「いいえ、ミス・サラ。お父様もお母様も、旦那様に知られないように、それはもう

注意しておられましたから」

「エドワードは意志が強いから、そんなことにあまり影響されたいと思いませんけど」

「御覧になったことを旦那様や奥様に話したりなさらないでくださいませ、ミス・サラ」と、老いた忠実な女中頭は嘆願するように言いました。「お知りになったら、きつと不安と悲しみに陥ってしまわれますわ。この屋敷に災難がやって来ているとしたら、それを食い止めることは人間の力ではできないんですから」

「災難がすぐ近くまで来ているなんて、そんなことがあるのですか！」と私は答えました。「幻とか、何かの前兆とか、私は信じませんよ。どうせなら、私は夢を見ていたのだと——窓際に立って目を開けたまま夢を見ていたのだと、そう思った方がましです——死者たちの幻影を見たと思うくらいならね」

マジヨラム夫人はため息をついて黙ってしまいました。どうやら彼女は狩獵グループの幽霊の存在を固く信じていたようです。

私は晚餐の着替えのために部屋に戻りました。自分が見たことについて、どんなに理性的に考えようとしても、それはなお私の頭と神経に強い影響を及ぼしました。他のことを考えるなんて不可能でした。不幸が近づいているという、そうした今までに経験のない病的な恐怖が、実際の重荷のように私にのしかかって来るような感覚に襲われました。

私が下に降りたとき、客間にいた人たちはとても楽しそうでした。晚餐の時も談笑は途

切れることがありませんでした。しかし、従姉のファニーの顔がいつもより少し心配そうに見えたので、間違いなく彼女は予定された息子のウィチャリー訪問のことを考えているのだと思いました。

そう思うと私は突然ある恐怖に襲われました。その日の夕方に私が見た幻影が彼にとつて——お屋敷の一人息子で跡継ぎのエドワードにとつて——危険の前兆だとしたら、どうなるのでしょうか？ このことを考えると、心臓が冷たくなりましたが、次の瞬間には、そんな自分の気の弱さがいやになりました。

「こんなことを年老いた女中頭が信じるのは無理もないことだけ」と、私は自分に言い聞かせました。「私のような女——教育を受けて世事に通じた女にとつては、途方もなく馬鹿げたことだわ」

しかし、その瞬間から私は、何とかしてエドワードの旅を中止させる方法がないものかと、いろいろ頭を悩ませ始めました。私自身の影響力については、たとえ一時間でも彼の出発を妨げることはできないかと思いましたが、ジュリア・トレメインであれば、彼を説得して行くことを断念させられるのではないかという気がしました。ただし、そうしたことを懇願できるほど、プライドを捨てて謙虚になれればの話ですが。それで、その晩のうちに私は彼女に訴えてみることにしたのです。

その晩はずっと全員が陽気に騒いでいました。召使いたちや招待客たちは大広間でダン

スに興じていましたが、私たちの方は小さな群れをなして天井^{さしき}敷敷や階段に座り、みんなの楽しい踊りを見ておりました。

そのような配置は男女がいちやいちゃするのに絶好の機会を与えるようで、このチャンスを若い人たちは十分に利用していました。エドワード・クライトンとその婚約者だけが唯一の例外で、その晩はずっと二人とも相手にわざわざ近づかないようにしていたようでした。

下の大広間で騒々しいダンスが行われている間に、私は何とかミス・トレメインを階段にある彩色窓の斜間^{はすま}へと連れ出しました。そこにあつた幅の広いカシ材の椅子に私は彼女と並んで座り、彼女に秘密を守る約束をさせてから、その日の午後に見た光景とマジヨラム夫人との会話の内容について、話して聞かせました。

「いや、まったく、ミス・クライトン！」ミス・トレメインは墨で引いた眉を上げながら、あからさまに軽蔑した様子で叫びました。「そんな馬鹿げたことを——幽霊とか、前触れとか、そんな老女の戯言^{たわごと}を信じるなんて、まさか私におっしゃるつもりではないでしょうね！」

「たしかに、ミス・トレメイン、超^レ自然的な現象は私にとっても信じがたいことです」と、私は真剣に答えました。「ですが、今日の夕方に見たのは超人的な現象だったので、よ。あのことを考えると、とても不吉な予感がします。どういうわけか、ウィチャリーを

訪問するエドワードと結びつけて考えてしまうのです。彼が行くのを妨げる力が私にあるのなら、ぜひともそういたしますが、その力がないのです。そうした影響力があるのはあなただけです。後生ですから、その力を使ってくださいませ！ 何としても、彼がダルバラ犬を連れてキツネ狩りに行くのをやめさせてください」

「私に恥をかかせてまで、彼に楽しみを控えるように頼みたいのですか、あなたは？ 先週、彼があんな態度を私にとったあとだというのに」

「彼があなたを怒らせるようなことをしたのは認めますが、ミス・クライトン、あなたは彼を愛しておいでです。プライドが高くて、その愛を皆さんにお見せになりませんが、彼を愛していらっしゃることは間違いありませんわ。後生ですから、彼と話をしてください。あなたがほんの少し言葉をかけてくださるだけで、危険を阻止できるかもしれないのですから、どうか命を危険にさらさないでくださいませ」

「私に気に入られようとして、この訪問を彼がやめるとは思えませんわ」と、彼女は答えました。「拒否されて恥をかくだけですから、そんなことをむざむざと彼にさせるわけには参りません。おまけに、このあなたの懸念はすべて馬鹿げたことです。みんな昔からキツネ狩りをして来たのですよ。私の兄弟など、冬は一週間に四回もキツネ狩りを行います、みんなけろりとしています」

私も簡単には匙さしを投げませんでした。このプライドの高い頑固な女性に対して、耳を傾

けさせることができる限りは、懇願を続けたのです。しかしながら、すべては無駄骨でした。彼女は最初の言葉に執着するばかり——プライドを捨ててまでエドワード・クライトンにお願いをするのは、誰が何と言おうといやだということでした。エドワードは彼女と距離を置きたかったようです。彼女の方も彼なしでやって行けるということをし、そして彼と別れて館を去る時には、二人とも赤の他人になっていそうだということを、態度で示していたのです。

このようにしてその晩は終わりました。翌日の朝食時に、私はエドワードが夜明け後すぐにウィチャリーへ向かったと聞かされました。彼がいなくなっただことで、少なくとも私は、仲間内にぼつかりと穴があいたような悲しい気持ちになりました。もう一人にとつても同じだったと思います。というのは、ミス・トレメインは表面こそいつも以上に陽気にふるまおうとし、普段とは違って誰に対しても愛想よくしようと努力していたにもかかわらず、その誇り高くて美しい顔は真つ青になっていたからです。

エドワードが出発してからの数日は時間の経過が遅く感じられました。心が圧迫されるような感じ——振り払おうとしても振り払えない漠然とした不安——があったからです。お屋敷はにぎやかな人たちであふれていましたが、エドワードがいなくなっただけとなつては、退屈で陰鬱な場所になつたような気がしました。彼が座っていた場所は別の人が占めていて、晚餐用の長いテーブルの両側に空席は一つもなかったのですが、いつも私には空

席があるように見えました。元気のよい青年たちはビリヤードの部屋で笑い声を響かせ、陽気な娘さんたちは相変わらず楽しげにたわむれ、お屋敷の跡継ぎがいけないことなど、どこ吹く風といった様子でした。しかしながら、私にとつては全部が様変わりしてしまいました。病的な妄想にすっかり取り憑かれてしまい、気がつくや女中頭の言葉を、つまり私が見た幻影はクライトン館にとつて死と悲しみの前兆なのだという言葉を、いつも気に病んでいたのです。

ソフィーとアグネスも招待客たちと同じように、兄がどうしているかななどには無関心でした。華やかな行事となりそうな新年の舞踏会のこと、二人とも極度に興奮していたからです。五十マイル四方の有力者がすべて出席されるということで、館の隅々まで遠方からの客人でいっぱいとなり、残りの客人は近くに住む比較的裕福な借地人たちの家に宿泊することになっていました。要するに、この行事の準備は大がかりなものだったのです。クライトン夫人は午前中いつも、女中頭との相談や、料理人からのメッセージや、花を飾る問題についての庭師の親方との話し合いといった、どれもこれも女主人が自ら注意を払う必要のあることで、忙殺されてきました。こうした責務や無数の客人たちからの要望などで、従姉のファニーはてんでこまいでした。それで、母親として胸中にどんな不安が潜んでいたとしても、身勝手に息子のことを心配する暇はほとんどありませんでした。館の当主に関しては、大半の時間を書齋で過ごしておられましたので——土地管理人と仕事の

話があるという口実で、実際にはギリシヤ語の本を読んでおられたのですが——心中を察することは誰もできませんでした。一度だけですが、私は旦那様がエドワードのことについて、その帰りをいかにも待ちわびていらつしやるような口調で、話されるのを耳にしました。

妹さんたちはウイグモア通りのフランス婦人帽子店から新しい帽子を受け取ることになっていました。それで、この盛大な行事が近づくにつれ、大きな箱に入った帽子類が続々と届くようになると、寝室や化粧室の扉を閉めて日がな一日、美しい装飾品について女性特有の意見交換や見せ合いっこが始まりました。ということと、例の形のない陰鬱な前兆に心を悩まされていた私も、谷間の百合⁽³²⁾がつけたピンク色の薄い絹^{チュール}⁽³³⁾のドレスやリンドの花がついた薄黄色のドレスについて、意見を求められました。

しばらくして——私には異常に長く思えたのですが——とうとう新年の朝を迎えることになりました。その日は快晴で、緑が見られない地表はほとんど春のような陽光に照らされていました。大食堂は、前の晩に行く年を陽気に見送ったあと、この新年最初の日の朝食に集まった者たちが、「おめでとうございます」とか「よろしくお願ひします」とか述べる声で、ざわついていました。しかし、エドワードはまだ帰宅しておらず、私はとても寂しい気持ちでした。この特別な朝、私はジュリア・トレメインが少しかわいそうになつて、彼女のそばに行きました。ここ数日というもの、ひっきりなしに彼女を観察していま

したので、その頬が日ごとに青白くなるのに気づいておりました。彼女の沈んだ眼と浮かぬ顔が、昨晩は眠れなかったことを示しています。そうです、彼女が暗鬱な気持ちでいたこと——プライドの高い、情け容赦ない彼女がひどく苦しんでいたことは確かでした。

「今日こそは帰つて来るはずですよ」朝食に手もつけず黙つて威厳を保ちながら座つていた彼女に、私は低い声で言いました。

「誰がですか？」と、彼女はよそよそしく冷たい表情で私の方を向いて答えました。

「エドワードですよ。舞踏会に間に合うように戻つて来ると約束していましたからね」

「クライトン氏の予定の行動などまったく存じませんが」と、彼女は横柄この上ない口調で言いました。「今晚ここに戻つて来なければならぬのは、当たり前のことです。州のお偉いさんが半分もいらつしやるのに、欠席して侮辱するようなことはなさりたくないでしょうから。お父様の館に今いらつしやる方たちに、ほとんど価値を認めていないにしましてもね」

「しかし、彼が世界中の誰よりも価値を認めている方が、ここにはいらつしやいますよね、ミス・トレメイン」この女性のプライドをくすぐるうとして、私はそう言つてみました。

「そんなことは存じませんが、彼が帰つて来ることについて、どうしてそんなに深刻になるのですか？ もちろん、帰つて来ますとも。帰つて来ない理由などありませんわ」

それは彼女には珍しいほど、そそくさとした話し方でした。また、彼女はなぜか私の印象に残るような、彼女らしからぬ、不審そうな、鋭い視線でこちらを見ました——とても強い不安を示しているような視線に、私には思えました。

「ええ、不安のようなものを抱く正当な理由はありません」と私は言いました。「が、この前の晩に私が言ったことは覚えていらつしやいますよね。あのことで私は絶えず心を痛めておりますので、彼が無事に帰宅した姿を見れば、それだけで得も言われぬ喜びとなるでしょう」

「そんな気の弱さにかまけるなんて残念ですわ、ミス・クライトン」

彼女が言ったことはそれだけでした。しかし、朝食後に客間で彼女を見た時は、館の正面に通じている長い曲がりくねった馬車道が見える窓際に、腰を下ろしていました。この場所からであれば、誰が屋敷に近づいて来ても必ず見えたはずです。そこに彼女は朝から晩まで座っていました。他の人たちはみんな、多少なりとも夕方の行事の準備で慌ただしいか、そうでなくても慌ただしい顔をするので忙しそうでした。それでも、ジュリア・トレメインは窓辺から動こうとせず、頭痛を口実として申し立て、本を片手に一日中じつと座ったままで、彼女の母親が部屋に戻って横になるように頼んでも、頑固に拒んでおりました。

「ジュリア、今晚は体調が悪いのだから、何もできませんわよ」トレメイン夫人はもう

少しで怒るところでした。「お前はとても長いこと顔色が悪かったけど、今日は幽霊みたいに真っ青ですよ」

彼女があの方の帰りを待ちわびていることは分かっていました。ですから、日が暮れても彼が戻って来ないと、本当に彼女のことがかわいそうになりました。

私たちはいつもより早めに晚餐を済ませ、照明がローソクだけで外来植物の匂いが漂うビリヤード室で、食事後にゲームを一、二度しました。それから、技巧と秘術を尽くして身ごしらえに専念する長い準備の時間となりました。その間、女中たちは洗濯場からフリルの付いたモスリンのペチコートを持って右に左に飛びまわり、廊下では髪先端を焼いた時のほのかな匂いが漂っていました。十時になると、音楽隊がヴァイオリンの音合わせを始め、きれいな娘さんたちと優雅に着こなした青年たちが、幅の広いカシ材の階段をゆっくりと降りて来ました。また、お屋敷の外では馬車を飛ばして来る車輪の音がだんだんと大きくなり、中では州の有力者たちの到着が伝令兵のような大声で告げられるようになりました。

その晩の催し物の詳細について長々と記す必要はないでしょう。他の舞踏会とほとんど同じ——素晴らしい成功でした。それは、心が浮き浮きして幸せな、今の快樂にすっかり身を任せることができる人にとっては豪華絢爛たる夜でした。ですが、人に言えない不安という重荷に心を圧迫された人にとっては、明るい色のドレスを着た美人たちを遠くから

眺めるような光景、つまり形と色だけからなる万華鏡を見るような、退屈な行列にしか見えませんでした。

私にとつて音楽は調べのないもの、まばゆい光景は魅力のないものに思えました。刻一刻と時間が経過し、夜食も済んで、みんながいつも最大の楽しみと言われる最後のワルツを楽しんでいましたが、それでもエドワード・クライトンは私たちの間に姿を見せませんでした。

「彼はどうしたのですか？」と、数え切れないほど何度も尋ねられたクライトン夫人は、彼の不在についてできる限りの謝罪をしておられました。かわいそうに、彼女はすべての招待客に同じような愛想のよい笑みで応対し、あらゆる話題に対して陽気にちゃんと答えておられました。彼が帰宅しないことが今や彼女にとつて激しい不安の原因になっていることは、瞭然^{りょうぜん}として明らかでした。一度だけ、数分間ですが、彼女が一人で座つてダンスを眺めておられたとき、私は彼女の顔から笑みがすつと消え、そこに苦悶の表情が浮かぶのを見ました。私は思い切つて彼女に近づいてみましたが、その時に彼女が私に向けた顔の表情は決して忘れられません。

「サラ、あの子は！」奥様は低い声でおっしゃいました——「あの子に何か起こったのだわ！」

私は必死に彼女をなだめようとしたが、自分自身の心もだんだん打ち沈んでいたの

で、その試みも不十分なものとなりました。

その日の夕方、ジュリア・トレメインは体面を繕うために最初だけ少しダンスをしていました。それは自分が恋人の不在に心を痛めていると誰にも思わせないためでした。しかし、彼女は最初のダンスを二つか三つしたあと、疲れたと言って年配の御婦人たちの間の席に引き下がってしまいました。まるで雲のようにふわふわした白いチュールのドレスを着て、ツタの葉にダイヤモンドをちりばめた冠を淡い金髪の上に戴いた彼女は、とても青白い顔だったにもかかわらず、それはもう美しく見えました。

夜も更けて行き、みんなが最後のワルツを踊ってぐるぐるまわっていたとき、たまたま私は部屋の端にある戸口の方を見たのですが、そこに夜会服を着ていない一人の男が帽子を片手に持って立っているのに気がついて、ぎよつとしました。男は心配そうな青白い顔をして、用心深く舞踏室の中をのぞいていました。私が最初に思ったのは不吉なことでしたが、次の瞬間には男が消えていたので、それ以上は彼の姿を見ることができませんでした。

長い一続きの部屋に人の気配がなくなるまで、私は従姉のファニーのそばにたたずんでいました。ふわふわのドレスを一晩だけの精力的なダンスでしわくちゃにしてしまったソフィーとアグネスも、自分自身の部屋に戻っておりませんでした。舞踏室に残っていたのはクライトン夫妻と私だけで、そこでは花がしおれてしまい、ローソクも壁から突き出た銀の燭

台の中で一本、また一本と消えていきました。

「夜会はとてうまく行きましたわ」奥様はかなり心配そうにクライトン氏の方を見て、そうおっしゃいました。旦那様は手足を伸ばしながら、とても安心したような態度で、あくびをなさっていました。

「そうだね、行事は本當にうまく行つたよ。でも、この場に姿を現わさなかったエドワードは、礼儀作法に違反したことになるぞ。きつと、最近の若い連中は自分の楽しみしか考へないのだからね。何か特別に魅力的なことがウィチャリーにあつて、そのために急いで帰ることができなかったのじゃないかな」

「約束を破るなんて、あの子らしくありませんわ」と、クライトン夫人が答えられました。「あなたは心配じゃないのですか、フレデリック？ 何か——何か事故でも起こつたとは思われませんか？」

「何が起ると言うのだね？ この州でネッドほど乗馬がうまい者がいるかね？ あれが怪我をする恐れなんかないよ」

「病気かもしれませんわ」

「そんなことはない。あれは若きヘラクレス⁽³⁴⁾だ。それに、病気などということがあれば——そんなことはあるまいが——ウィチャリーから伝言があるはずじゃないか」

旦那様がそうおっしゃったとき、老執事のトウルフォールドが不安に満ちた、しかつめ

顔でそばに立っていました。

「あの——ある方が旦那様にお会いしたいとおっしゃっています」彼は低い声で言いました。「二人きりで——」

「ウィチャリーからの使いなの？」と、奥様が尋ねられました。「こちらに来てもらってください」

「でも、奥様、旦那様と二人きりでお会いしたいと、その方は特別にお望みなのですが。書斎の方へお通しいたしましょうか？　そこなら明かりがまだ消えておりませんから」

「それじゃあ、やっぱ、ウィチャリーからの使いなのね」奥様は氷のように冷たい手で私の手首をつかみながら言われました。「私、言わなかったかしら、サラ？　あの子に何か起こったのじゃないかって。その方にはこちらに来てもらってください、トゥルフォールド。こちらへ、ぜひとも」

そうした命令口調は、いつも旦那様に対して恭順な奥様には、またいつも召使いたちに對して優しい女主人には、きわめて珍しいことでした。

「そうしてくれ、トゥルフォールド」クライトン氏がおっしゃいました。「どんな悪い知らせが届いたかは知らないが、一緒に聞くことにしよう」

旦那様は奥様の腰に腕をまわされました。お二人とも大理石のように顔面蒼白で、岩のように微動だにされず、これから自分たちに加えられる一撃を待つておられました。

訪問者が部屋に入つて来ましたが、それは私が戸口にいるのを見た男の人でした。ウィチャリー教会の牧師補で、サー・フランシス・ウィチャリーの礼拝堂つきの牧師でした。地味な中年の男です。彼は言わねばならないことをできるだけ優しい言葉で——キリストに仕える者として、また自分が経験した悲しみから思いつく、そうしたありきたりの慰めの言葉で——語りました。空しい言葉、無駄な骨折りでした。加えられる打撃は避けられないのですから、この世の慰めでは打撃を少しも弱めることができませんでした。

あの晴れた元旦の日に、ウィチャリーでは固定障害競争——紳士を騎手とするアマチュアの競馬——があつたそうです。それで、エドワードはお気に入り、の獵馬、ペーパーボックスに乗るように勧められたのでした。競馬に出てもクライトンまで戻る時間はたつぷりあつたので、彼は出場することを承知しました。彼の馬が簡単に優勝しそうに見えたとき、ちょうど最後の柵、すなわち先に水たまりのある二重の柵に来たとき、ペーパーボックスは急にストップして跳ぶのをやめ、頭から柵を越えて倒れてしまつたので、騎手は垣根を越えて、コースのすぐ内側の野原まで投げ飛ばされてしまいました。ところが運悪く、そこに重い石の地ならし機があつたのです。この石の地ならし機の上にエドワード・クライトンは落ち、その激突の衝撃をすべて頭で受けてしまつたのだそうです。すべてが語られました。この致命的な結末を牧師補が語つてるとき、私が不意に周囲を見渡すと、ミス・トレメインが語り手の少し後方に立っているのに気づきました。彼女はすべてを聞いていたので

す。叫び声を発することもなく、失神するような素振りも見せず、静かにじつと立ったまま話の結末を待つていたのです。

その日の晩がどのようなに終わったか、私は覚えていません。恐ろしい静寂が私たち全員を支配していたような気がします。馬車が一台準備されて、クライトン夫妻は瀕死の息子と対面するためにウイチャリーに向かわれました。エドワード・クライトンは競馬場からサー・フランシスの屋敷へ運ばれる途中で亡くなってしまったそうです。私はジュリア・トレメインに付き添って彼女の部屋へ戻り、冬の夜がしらじらと明けるまで——悲痛の夜明けまで、彼女と一緒に座っておりました。

* * * * *

もう話すことはほとんどありません。悲嘆に暮れていても人生は続いて行きます。クライトン館にはひっそりとして物さびしい時が訪れました。お屋敷の当主は、俗世間から離れて独り暮らす市井の隠士よろしく、独房のような書齋に埋もれてしまわれました。あの日からというもの、ジュリア・トレメインがほほえむのを見たことはない、という噂を私は耳にしました。彼女はまだ独身のままで、もっぱら父親の田舎の広大な屋敷に住んでいます。同輩に対して相変わらずプライドが高く打ち解けない態度をとっているものの、

近隣の貧しい人々の間では慈悲と憐れみにあふれる、まさに天使のように思われているそうです。そうです、かつて貧乏人のあばら屋は鼻持ちならないと言ってはばからなかった高慢な女性は、着ている服は別にして今や愛徳会⁽³⁵⁾の修道女のようなになったのです。このように女性にとつての大きな悲しみは人生の流れを変えてしまうのです。

その恐ろしい元日の夜以後も、私は従姉のファニーにしばしば会いしました。クライトン館ではいつも同じように歓迎していただきました。私は、大所帯の女主人として尊敬されている彼女が、穏やかな表情で快く自分の義務を果たし、娘の子供たちにはほほえみかけておられるのを見たことがあります。しかしながら、私には彼女の心のうちが分かります。彼女の人生の歯車を動かすぜんまいが壊れ、彼女に「喜びを与えるものが地上から消え失せた」⁽³⁶⁾のです。この世の喜びや楽しみをすべて冷めた、しかつめらしい顔で眺めておられる彼女にとっては、あらゆるものが大きな悲しみの暗い影のせいで光明を失ってしまったのでした。

【訳注】

- (1) フランス出身のイングランド王（在位、一一三五～五四）。ウイリアム二世（征服王）の孫で、ヘンリー一世の甥。ヘンリー一世の死後、その娘であるマティルダ（通称「女帝モード」）と長い内戦状態にあった。
- (2) ヘンリー八世の娘で、イングランド女王に就いたエリザベス一世（在位、一五五八～一六〇三）。イングランド教会を確立し、スペイン無敵艦隊を破った。
- (3) ジェイムズ二世の娘で、ステュアート家最後の君主（在位、一七〇二～一四）。イングランドとスコットランドを合併し、一七〇七年にグレートブリテン王国を成立させた。
- (4) バルト海に臨む港市で、ピョートル大帝によって一七〇三年に建都され、一七二二年から一九一七年までロシア帝国の首都。
- (5) イングランドとウェールズの各地で主として高等法院裁判官によって定期的に開かれた民事・刑事の裁判。一九七一年に廃止。
- (6) 十六世紀半ばからドイツで民衆本として流布した「メルジーナ伝説」は、ゲートルによって『ヴェルヘルム・マイスターの遍歴時代』（三巻六章）の中で「新メルジーネ」として改作された。ここでは、小箱から漏れてくる光に気づいて覗いてみると、素晴らしい宮殿の広間のような部屋が見えるが、角度を変えて覗いてみると、灯火が消えてしまつて真っ暗闇になると語られている。

- (7) チェコスロバキア製ガラスで、特にテーブルウェア用の彫刻のある光彩豊かなガラス。
- (8) 派手なプリント模様の手織りの木綿地で、特に垂れ布、掛け布として用いる。
- (9) 重苦しい彫刻、装飾、精巧な彫形くりがたなどの多用、強烈で黒ずんだ色彩の使用、幾何学的形状の強調などを特徴とする。
- (10) バークシャー州南部にあるパブリック・スクール。一四四〇年にヘンリー六世によって創立。紳士教育を伝統とし、上流階級の男子を全寮制で教育する。
- (11) 毛織物の一つで、梳毛糸そもうしで平織りにした薄地で柔らかい風合いのもの。
- (12) 桂冠詩人テニソンの『初期作品集』(*Juvenilia*, 1830) に収められた「オリアーナのバラッド」(*The Ballad of Oriana*) からの引用 (I feel the tears of blood arise / Up from my heart unto my eyes, / Oriana.)。
- (13) 布の表面に細かいさざ波状の凹凸が現れている布生地。
- (14) 慈善団体や篤志家の資金援助で運営された貧民のための小学校で、公立学校制度の前身。
- (15) 古代ギリシャのペロポネソス半島にあった高原で、牧歌的で平和な桃源郷という伝説で有名。
- (16) (シリアの首都ダマスカスにちなむ) 亜麻を使って、平織りまたは綾織り地に大きな織り模様を出した紋織物。
- (17) レ・ファニユ「オンジエ通りの怪」の訳注(11)を参照。
- (18) 一七二七年から六〇年まで英国王。強いドイツ訛の英語を話したが、知性も社交性も乏しく、軍事

技術以外にはあまり関心がなかった。

- (19) 刺繍・編み物用の細手の柔らかい毛糸。
- (20) 英国の昔の一ポンド金貨で、一九一五年に英国内での使用は廃止。
- (21) 十二月二十六日（法定休日）は「ボクシング・デー」と呼ばれるクリスマスの心付けの日。使用人や郵便配達人などに祝儀を与える。
- (22) レ・ファニュ「オンジエ通りの怪」の訳注(25)を参照。
- (23) 当時は上流階級も主要都市に支店を持つ貸本屋のミューデイズ・ライブラリーを利用していた。ミューデュー（Charles E. Mudie）は一八四二年に貸本業を始め、独自の経営で評判をとり、その本はイギリス全土に行き渡っていた。一九三七年に閉店。
- (24) オックスフォード大学のカレッジの一つ（一五二五年創立）。一五四六年にヘンリー八世の手で再建され、現在に至っている。
- (25) ウオリックシャー州、レスターシア州、ノーサンプトンシャー州などで、キツネ狩りが特に盛んな地域。
- (26) ペーパーボックスは胡椒入れ、短気者の意。ドルイドに関してはエドワーズ「鉄道技師の復讐」の訳注(2)を参照。
- (27) 牛の全乳製の硬質チーズと長毛の羊が有名な州。
- (28) ドイツの作曲家ウエーバーのロマン派オペラの先駆的作品（一八二二）。必ず的に命中するという

七発の弾丸（ただし、そのうちの二発は悪魔の意中の的に当たる）が悪魔から射手に与えられる。

- (29) アルコール溶液は気付け薬として使われる。
- (30) キツネが飛び出した時にハンターの発する声（view-hallo）。
- (31) 戸口・窓の両壁が内側に向かって広がった空間。
- (32) ドイツズランの別名。花言葉は「春と幸福の再来」。
- (33) ベール、イブニング・ドレス、バレエ衣装などに用いる薄い網状の絹。
- (34) 主神ゼウスの息子で怪力無双の英雄。
- (35) 一六三四年にカトリック司祭ヴァンサン・ド・ポールが創立した修道女会（Sister of Charity）。
- (36) 桂冠詩人ワーズワスの「不滅のオード」（Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood, 1807）からの引用（But yet I know, wherever I go, / That there hath pass'd away a glory from the earth.）。

【作品と作者について】

本邦初訳。原題は「クライトン・アベイにつ」(At Chrighton Abbey)で、初出はブラッドン(Mary Elizabeth Braddon, 1837-1915)の夫で出版者のマックスウェル(John Maxwell, 1824-95)が編集していた雑誌、『ベルグレイヴィア』(Belgravia)——ハイドパーク南の上流住宅地の名前から取ったもの——の一八七一年五月号。夫が一八七三年に三巻本として出版した『ミリー・ダレル物語集』(Milly Darrell, and Other Tales)に再録された。

ブラッドンは不品行な事務弁護士娘として一八三五年にロンドンで生まれたが、五歳の時に両親が離婚したので、自分と母親の生活費を稼ぐためにメアリ・セイトン(Mary Seton)という名前で地方の舞台に立った。女優をしながら詩や劇を書いていたが、六〇年二月(二十五歳の時)に作家に転向。彼女を有名にした最初の作品は第二作目の『レディー・オードリーの秘密』(Lady Audley's Secret, 1861-62)で、これはマックスウェルの二つの雑誌(*Robin Goodfellow* と *Sixpenny Magazine*)に連載された。マックスウェルと正式に結婚したのは彼の狂気の妻が死んだ一八七四年で、それまで二人は同棲していた。彼女は



マックスウエルの五人の子供を育てながら、自分自身の子供も六人産んだ。

ブラッドンは文筆活動においても多産ぶりを発揮し、五十五年間の作家活動において約八十の小説、九つの劇、数多くの短篇小説と随筆を書いた。殺人、自殺、狂気、姦通、脅迫、密告などを描いた彼女のセンセーション・ノヴェルは、夫が彼女のために創刊してくれた『ベルグレイヴィア』を通して出版され、一八六六年には彼女自身が夫に代わって編集者になった。「貸本小説の女王」と呼ばれたブラッドンは、主たる読者層が自分と同じように男性に対する社会的・性的な従属に不満を抱くミドル・クラスの女性たちであることを知っていた。彼女の作品に規範を転覆させるようなフェミニズム的言説が多いのはそのせいである。ブラッドンはフランス文学の擁護者としても有名で、一八五七年にはフローベールの『ボヴァリー夫人』を翻訳している。一九一五年にサリー州リッチモンドで死去。